

〔事例研究〕

虐待から抜け出す物語 —母親と研究者の「協働するナラティブ」—

門間 晶子¹⁾

要 旨

【目的】本研究の目的は、「協働するナラティブ」の考え方が子どもへの虐待から親が抜け出すためにどのような助けとなるのかを検討することである。物語の変化と問題の意味の変化と行動の変化は関連して生じている。ここではその経緯やなぜそのようなことが起きるかという理由を実例として示したい。

【方法】ひとりで子育てする女性への継続的なインタビューや親子一緒の場面への参加から子育ての経験や習慣、気持ちを教えてもらうという方法でデータ収集し、分析した。倫理的な配慮として、研究協力への自由意思を尊重し、研究協力者の都合や体調へ配慮し、プライバシー保護に留意した。所属機関の研究倫理委員会の承認を得て行った。

【結果および考察】〈虐待に直面している親の物語〉として、子育ての孤独感や子どもへ穏やかに向き合えず手をあげてしまう姿が語られた。手をあげる事情として子どもへの「わけのわからなさ」やそれを刺激する疲れ、孤独感、母親としての自分像への落胆感が説明された。母親と研究者との「未だ語られないものを探す」作業によって〈虐待から抜け出し新しい関係をつくる物語〉が生まれ、手をあげる行為を回避しうする姿、子どもとの関係を築き直し自分自身や自分の両親と向かい合う姿が語られた。本研究は語りの変化が現実の変化につながり、その人の歴史をいくぶんでも書き換えることになるという、Goolishianらが主張する「協働するナラティブ」の実践例ともいえる。

キーワードズ：ナラティブ、子ども虐待、母親、協働、子育て

1. はじめに

全国の児童相談所が対応した子ども虐待の件数は平成25年には7万件を超え、個人的な経験と捉えられがちな子育てという営みに、社会がどのように関わられるかが今問われている。子育てのダイナミックなプロセスの中には、親から子どもへ向かう否定的な感情も含まれ、発達心理学の領域では、菅野、岡本、青木他（2009）が子どもへの不快感情を取り上げた研究を行っている。看護学の領域では頼経、永山（2011）のように出産後間もない母親の子育ての体験に焦点を当てた研究がいくつかあるが、自我が

芽生える幼児期の子どもを育てる母親の困難感や否定的な感情とそれを母親がどう意味づけ対処しているのかに関する質的な研究はほとんど見られない。また、対話を通して母親の経験やその意味づけが変化するプロセスを描くという領域もこれまでにあまり研究として試みられていない。

人間の織りなす行為や関係を「語り」「物語」という視点からとらえ直す動きを象徴的に表す言葉である“ナラティブ”は、人間関係が生じる多様な領域で注目されている。保健医療の領域においてはとくに、慢性的な病や精神疾患等何らかの生きづらさを抱える人々への実践場面から関心が寄せられてきた。その背景には、個人や家族を支援するための研

1) 名古屋市立大学看護学部

究が自然科学をよりどころとする「論理実証主義」に基づいてきたことへの疑問があった。知るべき事実が客観的に存在し、観察者によってそれが見出され、客観的な記述が可能であるという考え方への不満である（アンダーソン、グーリシャン、野村、2013）。そこで「人間科学」とそれがよりどころとする「社会構成主義」が注目され、研究対象者と研究者は一線に分かたれるのではなく「同じ土俵の上で何かを一緒に行う」（杉万、2007）というスタンスによる研究への関心が高まってきた。ファミリー・セラピーのような家族支援の実践・研究においても、問題の単位を「個人」から「家族」へ移したその先のよりどころが見出せずにいたが、研究者をも含めたその問題に関わる人々の「関係性」に注目することが提案されるようになってきた。

社会構成主義の実践ともいえる「ナラティブ」には、すでにできあがったストーリーとしてのナラティブと今まさに話しかけ、応答し、対話しているという現在進行形のナラティブがある（野村、2006）。この研究では特に後者の意味でのナラティブを扱う。語り手と聴き手を一つのセットと考える後者のナラティブでは、語り手によって表現されたことにはまだ表現されていない部分があり新たな解釈の可能性があると考え、「無知の姿勢」に代表されるような聴き手の姿勢や役割が提案されてきた。

本研究は、「現実は会話を通して社会的に構成され、人と人との相互作用の中で共同制作される」という社会構成主義に理論的立場をおき、前述した「関係性」、すなわち語り手と聴き手の相互作用や関係のあり方から生み出される「新しい語り」や「未だ語られていない語り」そのものがもつ力に注目する。一方、家族支援に関わる人々は人の考え方や行動の変化に関心を持たずにはいられず、その人たちを苦しめてきた「問題」がどう解決されたのかが気になる。そこで、人が生きる現実の変化や問題の行き着く先に「語り」「ナラティブ」がどうかかわっているのかを説明することも視野に入れる。ここでいうナラティブは、現在進行形の対話であり、語り

手と聴き手の関係性や協働作業の結果生まれつつあるという意味に力点を置いた「協働するナラティブ」（アンダーソン他、2013）という言葉を用いる。

本研究の目的は、「協働するナラティブ」の考え方が子どもへの虐待から親が抜け出すためにどのような助けとなるのかを検討することである。物語の変化と問題の意味の変化と行動の変化は関連して生じている。ここではその経緯やなぜそのようなことが起きるかという理由を実例として示したい。

II. 研究方法

1. 研究協力者の紹介

研究協力者とその子どもには仮名を用いる。研究者（著者）のことは、語り部分以外では「私」と表現する。恵さん（仮名）は30歳代の女性であり、3年間交際していた人との間に子どもを授かったが、相手に結婚する気持ちがなく、ひとりで出産後、幼児期の碧ちゃん（仮名）を育てている。高校卒業後家業を手伝い、数年後実家を離れたが、妊娠後期と出産後の1, 2か月間は両親のもとで暮らした。非婚で出産することに対して両親から反対されていた。実際子どもが生まれて育児に格闘する最中にも、実家のサポートが得られたと感じられず、居心地の悪さを感じ、アパートを借りて乳児との二人暮らしを始めた。

私と出会った時、すでに恵さんは子育て経験2年を経っていたが、わが子を育てにくいと感じ、孤独感を抱き、同じような経験をしている仲間や交流の場を求めている。ひとり親家族のグループはないかと子育て関係機関に連絡を取るなかで、私が開く「ひとり親家族の交流会」のことを知り、車で1時間以上もかけて参加した。月1回のこの交流会で恵さんと私は2回同席し、子育ての大変さを聞いたが、グループでの会話ということもあってか、手をあげてしまう行為に悩んでいるということまでは感じられずにいた。恵さんにとって継続的に通うには交流会の場所は遠く、その後は足が遠ざかり、メール等で

近況報告を交していた。しかし私は恵さんの子育てについてもっと深く聴きたいと思い、その後インタビューを申し込み、了解を得て研究開始となった。

2. データ収集方法

本研究では、データ収集とそれに続くデータ分析がインタビューの継続やその間隔に影響するが、扱う現象が子育てという日々進行し継続する経験であるため、インタビューの回数や間隔をあらかじめ定めることは困難である。しかし、研究デザインから予測される方法としておおむね2か月間隔でのインタビュー (Holloway, Wheeler, 2010) を想定した。子育ての経験を理解するためには、一対一のインタビューに加えて、実際の親子の交流場面からも学ぶ必要があると考え、親子が共に過ごす場面に同席した。場所は恵さんの希望や都合に合わせて、自宅、大型店舗、公園などさまざまであった。語られた内容や私を交えた親子のやり取りは、了解を得てICレコーダーに録音した。

子育てにおける母子相互作用や揺れ動く母親の気持ちなどのダイナミクスを理解するためには、どのような方に語っていただくかは重要な要素である (内田, 2013)。私は、困難を感じながら子育てしている人の経験に関心を寄せていた。恵さんを自分の気持ちや出来事等を詳細に述べる力のある方と考え、「子育ての中で生じる、親である喜び、工夫、悩み」そして特に「子どもに手をあげてしまう行為をどのように感じ、経験しておられるのか」についてお聴きしたいと依頼した。

期間は2012年8月から2014年3月までの1年8か月であった。開始時点は、個人的な関わりを数か月経たのち、初めてインタビューを依頼した時点である。恵さんの子育ておよび私との関係性は継続しているため、終了時点を決めることは難しいが、恵さんの関心が自身の子育てのありようから、世間や同じ悩みを抱える人々に対して発信したいと考え始めた時点をとらえた。そして、10回目のインタビューの後に恵さんと私が協働で医療関係者向けの講演会の講師を務めた時点本研究におけるデータ収集の

終了時点とした。

3. データ分析方法

データ収集と並行してデータ分析を行い、データ分析の全体的な手順としては、子育ての経験の語りから逐語録・フィールドノートを作成し、研究疑問 (目的) に沿って考察した。詳細としては、

①語られた内容についての逐語録を作成し、熟読した。

②恵さんの個人的な子育て経験が語られている部分、恵さんと子どもや両親など周囲の人との関係性が語られている部分、子どもに手をあげてしまう等の虐待につながるような場面やその背景あるいは子どもへの攻撃を回避できた状況の場面等が語られた部分に注目した。

③その注目した部分について、文脈を壊さないように要約し、類似性や相似性の点から気づいたことをメモして分析に用いた。

研究の真実性や信用可能性、確認可能性を確保するため、次のことを行った (Holloway, Wheeler, 2010; Flick, Kardorff, Steinke, 2004; 竹崎, 2009) ;

①恵さんの語りと私の解釈を区別して表現し、生データから解釈へのプロセスを読み手が理解しやすいように示す②独りよがりな解釈を避けて多様な可能性を検討できるよう、ナラティブ研究の専門家からスーパーヴァイズを受ける③データの内容とその解釈について恵さんの確認を得る。

4. 倫理的配慮

研究開始に際して、研究協力は自由意思に基づき、いつでも取りやめることが可能なこと、データの匿名化とプライバシーの保持等を紙面に示しながら口頭にて説明した。録音時間が長時間にわたる場合があったが、途中で昼食やティータイムを挟みながら行っており、長時間インタビューのみで時間を拘束することがないように留意した。録音時間そのものが比較的長いのは、子どもと共に遊んでいる場面においても録音を継続していたためであり、録音時間がすべてデータ収集時間というわけではなかった。インタビュー等が恵さんの都合や体調に差支え

がないか確認しながら行った。

本研究は名古屋市立大学看護学部研究倫理委員会の承認（承認番号12016-3）を受けて実施した。

III. 結果

1. インタビューと参与観察の概要

計10回のインタビューが行われた。インタビューや親子の交流場面への参加以外にもお礼や近況報告等の主にメールによるやりとりを続けており、その様子から、次の面接日を定め、間隔は約2~3か月おきとなった。インタビュー等の概要は表1のとおりである。インタビュー時間は1時間23分~3時間32分であった。

また、正式なインタビュー以外にも、ひとり親家族の交流会、他の友人を交えての外出等において行動を共にすることがあり、そのような機会も恵さんの子育てを理解するうえで助けとなった。

2. 虐待に直面している親の物語

恵さんが直面する子育ての現実や子どもや周囲の人との関係性を要約と語りを交互に示しながら述べる。なお、語りがインタビューのどの段階のものであるのかを（○回目）と表記した。語りには、読みやすさを考慮して、話の趣旨を変えない程度に言葉を省略したり補ったりするなどの手を加えた。

1) ひとりの子育ては孤独でうまくいかない

恵さんの子育ては強く孤独感を抱いた状態で始まった。ひとりで育てることを決意して出産後1, 2

か月は実家で過ごしたものの、泣き叫ぶ乳児を一人で入浴させ、夜泣きにもひとりで対応し、予想以上の困難と孤独感を感じてきた。わが子の気質を育てにくいと感じ、理想の自分像は「子どもに愛情をもって一番の遊び相手になる」だが「実際は放置している」と自分を責めていた。子どもへの対応で困った時には保健師や児童相談所職員から具体的な助言を受けることもあり、恵さんは担当の保健師や児童福祉士の名前を把握していた。しかしなお、支えが少なく孤独な育児をしているという気持ちが勝っていた。

生まなきゃよかったと思うくらい苦しかったです。すごく育てにくくて、泣いてばかりなんですよ。(1回目)

毎日泣き叫ぶ赤ちゃんを一人でお風呂に入れた。洗面所は声が響く。気が狂いそうになった。母乳が離れるまで、毎晩夜泣き、地獄だった。こんな子いない、何度も放り投げた、今思えば怪我しなくて良かった。(3回目)

理想の自分像は、もっと子どもに愛情もって、一番の遊び相手になって…やってることと逆ですからね、放置ですからね、ほとんど。(2回目)

他の人の目があれば、頑張っている姿を見せることでよい母親でいられるし、イライラする気持ちも抑えられると感じており、そのために結婚相手を探

表1. インタビュー時の状況と語られたこと

回	場所	時間	娘の状況	語られたこと
1回目	協力者自宅	2時間27分	娘は保育者と遊ぶ	一時保護を利用したいきさつと気持ち
2回目	子育て支援センター	2時間16分	娘を遊ばせながら	ひとりでの子育てのつらさ、子どもの相手ができない罪悪感
3回目	ファミリーレストラン	1時間26分	娘は他所で保育	育てにくさ、他の人はどうしているのか知りたい
4回目	公園	3時間32分	娘は保育者と遊ぶ	別れたパートナーのこと、子育ての困りごとへの対応
5回目	公園	3時間3分	娘と遊びながら	子どもの障害への疑い、両親への気持ち、職場での人間関係トラブル
6回目	研究協力者自宅	2時間32分	娘は保育園	叩くのを回避する方法、両親を慕う気持ち
7回目	研究協力者自宅	2時間5分	娘は保育園	娘に発達障がい診断、疲れからヘルパー・休日保育園利用申請
8回目	子育て支援センター	2時間50分	娘と遊びながら	自分の診断結果、私だからこの子を育てられる
9回目	大型ショッピングセンター	2時間7分	娘は託児室使用	当事者グループの企画について、子育てへの気持ち
10回目	スーパーのフードコート	1時間23分	娘は保育園	セミナーについて打ち合わせ、子育てへの気持ち

した。仕事から帰るといろいろな人に電話で話したくなり、その間娘が悪戯を始める。そのことでイライラし、時に手を出してしまうという。いろいろな人に電話をしたくなる理由については、恵さんの職場の性質として世間話や冗談を気安く言える場所ではなく、厳粛な態度で勤めることが求められるという、仕事内容や職場の雰囲気とも関係があると感じた。

一対一の育児がこんなに苦しいなんて…孤独がだめ、話し相手とか、だれかいてくれないと育児ってできない。私が電話している時、相手にしてもらえないから電話切るまで悪戯、物こぼしたり植木倒したり、何か破ったり、だからばしーんってひっぱたく。(2回目)

誰かいてくれたらセーブがきくから、一対一だとすごい怒っていることでも、まあいっかですまされるし、もう一人いてくれたら、かわいいと思えるときがある。私と二人だけの時はただの問題児、何かやらかす。人の目があるので、私には、ビデオで二人の様子を撮るっていうのなら頑張ります、育児をもっと。(1回目)

また、恵さんは休日でも頑張っって早起きし、子どもの生活リズムを大人の都合で崩してしまうことを恐れていた。公園などに出かけると、きちんと子どもの相手をしている良い母親のような気がして安心できた。

予定は絶対入れる、朝から動かないとだらだらしてイライラする。完璧主義者というのか強迫観念がある。碧の生活を崩しちゃいけないという責任感。生まれた時から気が張っていた。私のせいであらけるとかわいそう。小さい子のリズムを大人が崩すのは罪悪感でいっぱいになる。そういう時にもう一人いて、「まあいいんじゃないの、今日くらい」と言ってくれたら、あ、そうかって思える。(1回目)

2) 子どもへの「わからなさ」が手をあげる・手をかけない行為に

恵さんは育児がどのようなものかを知らないまま子どもを産み、サポートが少ない中で子育てを開始した。「何で泣いているのかわからない」という状況は娘が乳児の頃から、そしてある程度会話が可能になった頃においても恵さんを困惑させた。恵さんは私の疑問に答えて時には娘が泣き出す理由がわからなく途方に暮れる具体的場面を話してくれた。そして子どもに対して愛情や母親であるという実感もてないまま、必要最低限の世話を淡々とこなす姿を「召使いのように」と表現した。

育児のすさまじさを知らなくて、こんなに育児が大変だとは聞いたことがなかった。なぜ泣くのかわけわかんないから、うるさいなあって手が出ちゃう。泣かずに何をしてほしいか言いなさいって。あの子十分しゃべれるんですよ、ただ泣いてるんで、それが頭来て、頭たたいちゃうんですよ。キレちゃうんです。そうするとよけい泣きますよね。よくないってわかってるんですけど、ほんと、イラつきますね。毎日だとこれが、理由がわかんない。(3回目)

これまでずっとただの召使いみたいだったんですよ。面倒見てるだけ。ごはんも着替えもおむつも全部私。ご飯食べさせてお風呂入れて風呂あがったら耳掃除して、水分補給して、歯もあ〜んって磨いて、これ召使いですよね、育児って感じじゃなくて。(1回目)

穏やかに子どもと向き合う方法がわからず、一対一ではすぐにかっとなり手が出てしまう。手をあげる場面としては子どもの危険な行動を制止するときと自分のイライラが募るため、イライラの直接の要因には食べ物をこぼす子どもの行動等「我慢できないツボ」があり、誘発する状況として仕事や家事への疲れ、孤独感、理想的な姿と自分の現状とのギャップ、等が語られた。大人を困らせる場面につ

いては、子どもなりの理由があることに気づいており、子どもの要求に応じていない自分を責めていた。

イライラしている時に、許せないものがあった、食べ物や物を投げる、こぼす。電話している時にそれをやる、相手をしてほしいとわかっているけど、後回しにしちゃう、一番最初にこの子を考えなきゃいけないのに、できていない自分にいら立つ、私が見ていたらいたずらはまずしない、それをわかっているのに。(1回目)

その一方で、ただ育てにくいと感じてきた娘に、集団行動が苦手などの特性があることがわかると、自分も幼い時そうであった、今の自分にも似ており気持ちや行動がよく理解できると語り、娘の姿の中に自分の姿を重ねるような語りが聞かれるようになった。

碧も私と似ているのかな。型にはまりたくない、やりたくないんですね。(子育て支援センターにてみんなで歌うシーンで) こういう時どっか行きたくなるタイプ。気持ちよくわかるんですよ。(2回目)

また、テレビの見せ方等子どもの生活リズムを守ることや飲酒・喫煙等自分の嗜好等に対して、よい親でありたいとの気持ちから極端に厳しくするかあるいは緩めてしまうか、いずれかに偏りがちであり、自らの気分転換やストレス緩和と子どもの生活を守ることとのバランスを取ることが困難であった。

テレビに頼ってるんですね。今まで見せてなかったのは保健センターとかに書いてあるから、何時間しか見せちゃいけないと。でもストレスになるし、見せたらいいよって児相の人にも言われて。それからばっ続けで見せてま

す。タバコもやめていたけど(一時保護で子どもが不在時に)、いや、吸っちゃえって。(1回目)

3) SOSを出して子どもと離れる

ある夜、娘に手をあげてしまう気持ちと行為とに、これ以上ひとりでは持ちこたえられないと感じ、親へ電話をかけたが、軽く扱われ、怒りと共に児童相談所に助けを求めた。恵さんの反応にただならぬものを感じた母親は、児童相談所よりも早く恵さん宅に到着した。

この出来事は最初のインタビュー前の出来事であり、恵さんは子育てのことを教えてほしいという依頼に、まずこの話をしなければと、一時保護を頼んだいきさつ、その後の自分の苦しい気持ち、子どもの立場で考えたこと等を語ってくれた。娘と離れたことでほっとしたのも束の間、「捨ててしまった」と悔やみ、早く戻してほしいと願う毎日となった。その後また手をあげてしまうことがあるが、子どもと離れたくなっても、一時保護を願い出ようとは思わない。しかし、子育てを辛いと思う気持ちを持ち続けたままであった。

夜中に(母親に) SOSを出した時、「今から飲みに行く」と言われた。私がどんなに追い詰められているのかわかっていない。(児相がくる直前につけた) 母親の前でわんわん泣いて「一人は無理、孤独に疲れた」って。あんな思いは二度としたくない。見知らぬ場所に連れて行かれ、どんなに不安だったか。(1回目) 捨てちゃった気持ち。手放した、放棄してしまった。罪悪感に苛まれ、頭がおかしくなった。時期を早めて返してくれと何度も頼んだ。子どもは知らないところに行って、どんな気持ちだったか。自分の身勝手にふりまわしてしまった。児相に預けたなんて恥ずかしくて誰にも言えなかった。このままいくと、もっとやっちゃう(子どもをたたくこと)と思った、それ

よりは良かったと思う。(1回目)

今だって母親だという実感は持てない、一生持てないと思う。預ける前はもうどうでもいいと思ったけど、次の日から罪悪感。(5回目)

3. 虐待から抜け出し、新しい関係性と現実をつくる物語

1) 子どもとの関係を築き子育ての現実をつくる

「困った子ども」から「私もそうだった」へ

恵さんは、娘が発達障がいと診断される以前から、集団での遊びが苦手であったりパニックを起こしやすかったりする娘の気質に気づいていた。特に、新しい場所や集団行動が苦手である特性を自分と似ていると感じ、共感する気持ちをもっていた。しかし、共感・理解できるなら親として対応しやすいのではないかという私の問いに対して、似た者同士の自我がぶつかり合って、よりうまくいかないと言った。

こだわりが強いので、(ブランコで)全く同じものでも、もう右じゃなきゃダメ、左が空いていても、恥ずかしいくらい大声で癩癩起こして、ひっくり返って泣く。周りからも白い目で見られるし、無理やり抱っこして車まで行き、ぼーんとぶち投げて、「うるさいわ」って、車の中で怒鳴っちゃったり。(7回目)

自分と一緒になんですけど、だからこそわかんないのかな。碧は自分の思い通りにならないとダメなんですね、私も、自分の思い通りにならないとダメ、だからイラつくわけですよ。これをどうしたらいいのかわからないんです。(6回目)

「よその子」から「生活のパートナー」へ

インタビューが進む中で、娘をたたきたくないという一心から、それを回避するためのいろいろな方法を試す様子が聞かれるようになった。その方法を教えてほしいという私に対し、よその子どもには優

しく関わられるという理由からよその子だと思って接する、子育て場面を録音して後から聞き直す、きつく怒る等の子育ての行動をカレンダーに書きこむ等、子育てを客観視する工夫を説明してくれた。どんな時によく怒ってしまうのかのパターンを分析して私に話してくれることもあった。

別の工夫としては、子どもを褒める、物まねや競争ごっこ等遊びの要素を取り入れる等、子どもとの間に心地よい循環を生み出すような関わりであった。娘の発達障がいを疑い始めたころからは、関連する本を読み、セミナーに参加し、親の対応の大事さを語り、その工夫として写真を使って子どもへスケジュールの説明をしていた。これらはどの方法も娘のお気に入りとなった。このような、心地よいかかわりの最初の取り組みが「とにかく必死で褒める」ことであり、排泄がうまくいくなどの効果が実感できた。一方、褒められた際の娘の様子を私が尋ねると、恵さんは褒めることに必死で娘の反応を見ていなかったと語り、親子のやりとりを楽しむということにはつながりにくいようであった。10回目のインタビューを終え、子育て支援者対象の講演会で講師を務めた際は、恵さんは育てにくい子どもを育てるさまざまな工夫を生き生きと語った。

次の語りは、「よその子だと思う」「子育ての場面を録音する」という恵さんの工夫に関するものである。どんなときに「きれてしまう」のかについての分析が込められ、母親の協力の意義も語られた。

自分の子どもだと思うのはやめて、預かった子にしようと。人様の子は叩かないですよ。自分の子だと許せない。でも叩いていいことも怒鳴っていいこともない。だったら、私の頭の中だけで、心の中は預かってきた子、人様の子だと思って接する。呼び捨てせず〔ちゃん〕づけて呼んだりして。(6回目)

誰かの目があれば制御が効くので、ビデオ撮影かICレコーダーで録音しておくんですよ。録音されている意識があれば、自分の行動も制御

できるし、きれてる自分の声とか叩いているのとか、聞きたくない。そういえばそれ、最近やってないわ。診断名出てから、すっかり忘れていた。関わり方変えたから、でもセミナー受けないと、時々やばくなる(たたきそうになる)。ばあばが来ない日はICレコーダーをやらないと。(8回目)

ここで、7回目のインタビュー後に恵さんがくれたメールと8回目のインタビューの一部を紹介する。この時期は娘が発達障がいの診断を受け、一時期気持ちが落ち込んだものの、その後、自身にも同様の気質があることがわかる。恵さんの語りは心配な要素を抱えてはいるものの、虐待から抜け出しつつある人の語りにも変わっていた。

最近、手を出す事はなくなりました。碧と自分の特性が分かってきたからでしょうか。でも怒鳴ることはあるのでよくないのです。前は碧をよその子だと思って接していると言っていました。今は生活を共にするパートナーとして同等にみえています。碧はやりたい事をやっただけなのに私のわがままで怒鳴られたら、あまりに不憫だとセミナーで言われた時、泣きそうになりました。私の身勝手さに呆れ、碧に申し訳なくて仕方ありませんでした。反省反省の毎日です。(7回目の後のメール)

やっぱりね、たまに、どうしてもイライラしちゃうこともあって。前と比べるとね、手が出なくなって、たまに大声で怒鳴っちゃうときがあって。急ぐってことがわかんないんですよね。それも電話で(児童相談所の職員に)聞いたんですよ。3歳児が「急ぐ」を理解するのは無理だから、もう大人がやってあげる、最後の完結だけやらせてあげて、よくできたねってほめる。じゃあ私がやればいいんだって気が楽になる。(8回目)

2) 自分の親と、そして自分自身と向かい合う
「親に理解してほしかった私」から「親を理解しつつある私」へ

親との関係については、恵さんの語りから仲のよさそうな様子と疎遠な様子の両方を感じ、私はその違和感を口にした。甘やかして自分の言いなりだった母親、小中高生のころは存在感がなく成長してからは犬猿の仲の父、というように当初は自分と両親との不仲や「仮面家族」という表現で語られたが、徐々に、自分が親にもっと関心を示してほしかったこと、安心感や安らぎを求めてきたという気持ちが語られるようになった。娘が発達障がいの診断を受け、自分にもその傾向があることがわかったことで母親としての自覚をもてたこと、自身や両親を理解することにもつながったことが語られた。そして、母親が週に2回は泊りがけで育児を手伝ってくれること等、親なりに一生懸命関わってくれていることに思いが及ぶようになった。両親が自分に対してあまり関心を示さなかったと感じてきたことについては、両親が自分を扱にくかったのかもしれないと考え、両親を理解しようとする気持ち、両親もまた、生きづらさを抱えてきた人たちではないかという考えも語られた。

記念日には写真撮る、食事する、仮面家族、私が求めていたのはもっと精神的なもの。(5回目)

ほっとできる場所、それが親ですよ。パート先に親が来てくれたら、すごくうれしいと思う。(6回目)

母親と一緒に発達障がいのセミナーにも行ってもらって、碧だけでなく、私への対応も変えてほしいと言いました。一番変えてほしいところは、人の話聞かないところ。父も母も私の話なんにも聞かないんです。質問もしてこないし、何も関心ないんですよ。私は扱にくかったのかな、その理由が今はわかるからいいんですけど。(8回目)

「ひとりでは育てられない」から「向き合っていけるのは私しかいない」へ

なぜ生んでしまったのか、ひとりでは育てられない、と結婚相手探しをしていた恵さんであったが、自分が親になった意味を見出し、娘に向き合えるのは自分しかいないと考え、ひとり親として子育てしている自分を肯定的に捉える語りが聞かれるようになった。

私はシングルマザーになるべくしてなったんだと思う。碧が生まれたから自分の障がいかわかったし、碧と向き合っていけるのは、たぶん私しかおらんかな。私は生きづらかったので碧にアドバイスもできるし、とりあえずやりたいことはやらせてあげて、いやだって言ったらやめさせてあげる。部活でもクラブでも。(8回目)

イライラするんだけど、自分を知るために産んだような、だから、笑えたんですよ、自分の診断名がわかった時、初めて親子だと思った。母親だと実感できたんですよ。親の実感がないとか、母親って気がしないとか、ただ世話してるだけとか、手を出さないために他人の子と思うとか、今まで何度も言ってきたけど、初めて私の人生の生きにくさがわかったと思ってほっとした、なんか答えがやっと出たっていうか。(8回目)

恵さんは、当初は幼少の娘に対して「言えばわかるはず」、「この子はもうしゃべれるから」等と捉え、言い聞かせて育てようとしてきた。ところが診断を受けるなどして娘の特性に気づいていくなかで、先に述べたように自分や両親のことを理解していくと同時に、当初の恵さん同様に娘に叱って理詰めで対応しようとする父親に対して、碧ちゃんの状況を代弁するような語りが聴かれた。

父に碧のこと話したけど喧嘩に。ほめて育て

るってというのが理解できない。昭和の人って叱って育てるのが当たり前。何か教えるときも「ダメだよ」じゃなくて「こうしよう」って肯定的に教えてほしいって言う。「そんなんでいいの、俺はそうは思わん」「勝手に育てていけ」って。(8回目)

3) 自分の経験を土台に、同じ悩みをもつ他者とつながろうとする

「人間関係が苦手な私」から「当事者グループをつくろうとする私」へ

私は恵さんに初めて会った時から、人に対して細やかな気遣いをする人だと感じてきたが、恵さん自身は自分のことを人間関係が苦手と感じてきたようであった。8回目のインタビューの際の恵さんは、発達障がいの勉強を続けており、碧ちゃんへ穏やかに簡潔に話しかける様子に、勉強の成果が表れているようであった。自分にも同じ気質があるとわかったことによって、これまで自分の性格が悪いのだと思いついてきたがそうではなかったと自分を肯定的に捉えられるようになったという。子育ても自分の気質についても、いろいろと勉強して工夫してきた恵さんだからこそ、これからは人に伝える側になれるのではないかと私は率直な感想を述べた。

その夜、恵さんからメールがきた。「発達障がいをもつ大人の当事者の会を開きたいので助言してほしい」と。そこで9回目のインタビューでは恵さんが作った企画案に込められた当事者の会に抱くイメージを聴き、私は運営面での手伝いを申し出た。恵さんは「母親たちの自己肯定感を高めたい」と何度か口にした。

「一方的に伝えようとする私」から「他の人と相互作用の中から発信しようとする私」へ

また、私が依頼されていた母子保健関係者を対象とした子育て支援に関する講話を、恵さんとの協働で行うことを思いつき、その準備にとりかかった。恵さんの担当内容は自身の子育ての工夫であり、最初はきちんとした原稿を準備したいと言っていた

が、「その場で会場のみならずつくっていくという感じでもよいか」と尋ねるようになった。

こうやって一人でしゃべっていると言えるんですけど、舞台に立つとね、たぶんちょっと言えないと思うんですね。だからある程度のセリフを書いて、見ながら言った方がいいなと思います。(10回目)

当日は、何かを見て話すのではなく、門間さん(研究者)と会話するような感じ…その場の即興で答えていく形で良いでしょうか。あまり文章通りだと、聞いている方々も疲れると思いますし、これはいろんなセミナーに参加してみても分かったんですが。(10回目の後、講演会直前のメールより)

IV. 考察1；研究協力者の変化とナラティブ

ここでは、研究協力者の語りや現実の変化に焦点を当てて考察する。恵さんの語り<虐待に直面している親の物語>から<虐待から抜け出し新しい関係をつくる物語>に変化すると、実生活を恵さんが「たたかなくなった」と語ることは関係していた。恵さんとのやりとりを振り返り、物語の変化の起点を手掛かりにして、「協働するナラティブ」がどのように生成されたのか、虐待から抜け出すためにどのような考え方と関わりが助けとなるのかを考察する。

1. 無知の姿勢そしてユニークな物語が生まれる質問

自分の子育ての状況を説明する「召使いのように」や子育ての困りごとと自分との距離をつくるための「よその子だと思う」などの表現は、決して愉快的な気持ちから出たものではなかったが、恵さん独自のユニークな表現が生き、ユーモアが生まれる可能性を秘めていた。たたきたくないという必死の気持ちから思いついたことであり、「どのようにして

それらを思いついたのか？」という私の質問に対して、恵さんはその経緯や試行錯誤を生き生きと語ってくれた。そのときの恵さんと私は、聴き手の「無知の姿勢」(野村, 1999)に応える語りを通して協働で現実がつくられる場面にしたものと考えた。「うまくいったのはどんなときか」「何が役立ったのか」といった質問によってこれまで自分にへばりついてきたような「問題」が自分から切り離され、現実を変化させることにつながった。これがナラティブの要素である「外在化」や「ユニークな結果」(野口, 2002)の例であろう。私の質問に応えようとして恵さんが語る自身の姿はすでに、子どもと遊べない姿でも、子どもを褒めることに必死で子どもの反応を楽しめない姿でもなかった。

子どもの行動をどう捉えるかという恵さんの語りには、当初からある見方とそれに対する別の見方が同時に立ち現れていた。例えば「なんで泣いているのかわけがわからない」に対して、「何か言いたいことがある、私にはわからないだけで」という捉え方、「物を投げたりこぼしたりは嫌がらせ」に対して「かまってほしいだけ」という見方である。そして、娘への「とにかく育てにくい子ども」という全般的な評価にも「元気なだけなんですけどね」という別の眼差しが控えていた。食事や入浴を嫌がって思うような行動をとってくれずイライラする際も、「やりたくないよね、わかるよ、私もそうだった」という子ども視線からの見方が語られた。このような代替の視点は、それだけですでに、子どもを傷つける行為を回避させる要素となりうる。そのような見方ができる力はそもそも恵さんに備わっていたと思われるが、関心をもつ聴き手を得て対話が開かれるという関係性の中で、より促進されたとも考えられる。林、横山(2010)はイライラが賦活されたとしても、自分自身の行動をコントロールしやすくなる母親側の要素として、「自分の経験を具体的に語る力」をあげている。このような力を親側の資質とみなすのではなく、聴き手と語り手との相互作用の中で生まれてくる力でもあることを本研究は示唆で

きたと考える。

2. 「いまだ語られなかった物語」を一緒に探す

1) 親もまた、子育てに悩む人であった

「甘やかされた」「犬猿の仲」という両親に対する表現と、記念日や行事には集まり食事するという様子とに違和感を覚えた私の質問に対して、恵さんは当初「仮面家族」というドミナント・ストーリー（支配的な物語；野口，2002, p. 80）を用いて応えた。自分の家族のユニークさを言い当てる言葉を探せていなかったのであろう。インタビューが進む中で徐々に家族を表現する温かい言葉を見つけ出すようになった。自分が育った家族を、体裁を重んじる「仮面家族」という見方から、こうあってほしいという願いも込めて、ほっとできる心のよりどころとしての家族、今なら理解できる家族、というように変化させていった。聴き手に問われる中で語り手がふさわしい言葉を探し、自分の家族についての現実を変化させた例であると考えられる。

子どもを育てるなかで自分の育てられ方を振り返り、恵さんは親から理解してほしいと願った幼いころの自分にもう一度出会うような体験をしていたと思われる。両親に、娘だけでなく自分への対応も変えてほしいと頼むなかで父親との衝突を経験するが、それは以前の衝突とは異なり、考え方をぶつけあうような、新しい交わりともいえるものであった。また、自分が扱いにくい子どもであったことを想像し、親もまた、悩みながら子育てしてきた人ではないかという新しい親の姿が恵さんの現実の中でつくられたのではないだろうか。

2) たたきたくなくても何とか対処しながら育てている

「自分の子どもだと思わずによその子だと思う」という見方は、何とか穏やかな気持ちで子どもと向き合いたいという必死の願いから生み出された工夫であったが、自らその表現に違和感を覚えた恵さんは「生活を共にするパートナー」と言い直す。そのような自分と子どもとの関係性の表現の変化とともに、自分だからこそ育てられるという気持ちの変化

も生じた。すなわち「育てにくい子どもをひとりでは育てられない」という現実から、さまざまなサポートを受けながらも「向き合っているのは私しかいない」という現実への変化が生じたと考える。具体的な行動で考えると、「つい叩いてしまう」という現実から「何とか叩かずに過ごしている」という現実に変化したのである。

3. 問題が「解消」に向かうことと変化との関係

いまだ語られなかった物語を一緒に探すというプロセスを経て恵さんの生活に生じたことは、娘に向かい合うことの難しさが必ずしも「問題」ではなくなってきたこと、またそれを解決したいと思っていたが、いつのまにか「解消」に向かっていた、ということではないだろうか。これは「語り口が変わると心理的な問題が形を変えたり消滅したように見える」（アンダーソン他，2013, p. 41）の実例ではないかと考える。あるいは「新たな意味やこれまでとは異なる言い回しが話し合いの中から現れると、『問題』と呼んできたことが、少なくとも言葉の上ではそぐわないものとなる」「問題についての説明が変化し、使われる言葉が変化することによって、問題は『解決ではなく解消』に向かう」（アンダーソン他，2013, p. 69-70）という現象であろう。そして、変化とは何かということについては、「対話を通して新しいテーマが現れ、新しい物語が展開されるが、そういう新しい語りはその人の歴史をいくぶんでも書き換えることになる」（アンダーソン他，2013, p. 61）と考えることができる。

V. 考察2；研究者の変化とナラティブ

ここでは、研究者の変化に焦点を当てて考察する。まず、研究者である私がしてきたこと、少なくとも心がけてきたことを振り返る。対話の空間を広げるような質問をしたこと、それを通していまだ語られなかった物語を一緒に探そうとしたこと、恵さんが使う言葉を学習し、それを使って会話しようとしたこと、あまり急いで理解しようとしなかったこ

と、恵さんがもつ知識や強みに着目してそれに重きを置いたこと等であった。これらはいずれもナラティブの基本的な姿勢として提案されてきたものであり、アンダーソンはこれらをテクニクではなく考え方とスタンスであるという意味を込めて「やり方に対してあり方」(Anderson, 2001, p. 117-119)と説明している。

また、研究期間が終了しても終わらない姿勢として、悩みながら子育てに向かい合うという恵さんの人生の隣にいつもいようとする(伴走者になる)こと、恵さんの苦しさやもがきを確かに見聞きしたという自覚と責任をもつこと(倫理的に立ち会うこと、倫理的証人; Kleinman, 1996)がある。恵さんは4回目のインタビューで初めて、別れたパートナーとの関係を語ってくれた。それらは今回の研究のデータとしてはほとんど用いられることはないが、私にとって強く心を揺さぶられる経験となった。非婚で子どもを産むということの、誰にでも起こりうる普遍性を感じ、サポートが十分ではない環境の中で子どもを産んで育てることを選択した決断を聞き、社会はこのような親を支えなければならぬと強く思った。ナラティブ研究においては研究の終わりが関係の終わりではない。

一方、私がこの研究でできていなかったことがある。私は碧ちゃんを「育てにくい」という恵さんの気持ちになかなか近づけないでいた。ある日、恵さんが運転する車の後部座席に座った私は、狭い車内で泣き叫ぶ、まさに「手がつけられない」碧ちゃんの様子を目の当たりにした。「育てにくい」という親の訴えに、私たち支援者と呼ばれる人たちは、もしかしたら「子育てが苦手・下手」と安易に考えがちではなかっただろうか。生活の様々な場面で一緒に行動することを通して、子育てについてもっと相手から教えてもらうべきなのではないだろうか。本研究はインタビューと参与観察を組み合わせに行ったが、親との一対一の会話だけではわかりにくいこと、かえって誤解してしまうことを、複数の接点をもって関わるのが補ってくれることは、研究とし

ても実践としても大事なことであろう。「障がいがあるから育てにくかったのだとわかったことで自分を赦せた」という恵さんの気持ちを、私はどれだけわかろうとしていただろうか。

実践者と研究者に求められる姿勢は「言われたことを本気でとる、よく覚えている、語られた些細なことをその面談の中であるいは他日にもう一度取り上げられるように注意を払っておくこと」であるという(アンダーソン他, 2013, p. 67)。恵さんは「前にも言ったと思うが…」と前置きして語ってくれることがよくあった。私は以前聞いていたはずのことを、うっかりと忘れていたことがあり、先の姿勢が不足していた。一方で、以前聞いたことだとは思っても、それが意味づけに関するようなことであれば、もう一度話していただきたいとお願いした。そうすることで、いまだ語られなかったことが共同で探索できることもあると思うからである。

VI. 研究協力者と研究者の協働からの示唆

語りが変わることで変化が起こるということが「結果として自然に生じる」のがもどかしく感じるくらい、子育ての疲弊感や子ども虐待の影響は深刻である。「協働するナラティブ」が何をなし得たのかを研究者の介入という視点からではなく、共に会話する、対話することの意義として示すことが求められている。本研究ではある女性の子どもを含めた周囲との関係性や子育ての現実が変わっていくプロセスを描き、「協働するナラティブ」によって作りだされた子育ての物語が、虐待から抜け出す物語になっていることと現実での虐待行為が解消していくこととの関係を示すことを試みた。子育てにおける負の感情と親の体験に迫る研究としてはこれまでに母親の子どもへの不快感情を取り上げた研究(菅野他, 2009)や育児初期の母親の心理的混乱を扱った研究(浅賀, 三浦, 2011)などがある。また、語り手の経験を軸に母親の社会的苦悩に焦点を当てた研究があるが(門間, 浅野, 野村, 2010)、ナラ

ティブ研究の可能性に焦点を当てており、研究協力者と研究者の「協働」については踏み込んでいない。本研究は、子育ての経験に関して研究協力者と研究者あるいは聴き手と語り手の変化の双方を扱い、その関係性を検討した。子育てに関する行動の変化が対話の中で生まれた意味を共同で探索するなかで起こり、そうして生まれた新しい意味はその人が過去の人間関係の中で思い込んできたこと、すなわち人生の一部を書き換えることになることに、实例を通して迫ることができたのではないかと考える。

虐待の真ただ中にある物語から、虐待から抜け出す物語が語られるようになることと、実生活での手をあげる行為の減少とはつながっていた。抜け出しつつある物語を語ることで実際に抜け出すという現実をつくりあげていたのである。つまり、「未だ語られていない物語が変化を生んでいく」のであり、だからこそ、共に物語をつくるという作業は家族支援の要となる。

本研究では研究協力者の変化と研究者の変化および両者のつながりを論じた。恵さんは今も日々葛藤しながら反省しながら子育てしており、私は日々自分の応答を振り返りながら、そんな恵さんと、恵さんを大好きな碧ちゃんのそばに続けようとしている。ナラティブ研究では研究の対象は研究者自身にもおよび、研究の終わりが関係の終わりではないことを日々実感している。

謝 辞

豊かな子育ての体験を何度も、心を込めて語ってくださった研究協力者の方に、心よりお礼申し上げます。

また、「協働するナラティブ」の考え方、研究者の姿勢、語りの解釈についてご示唆をいただきました。名古屋市立大学大学院人間文化研究科 野村直樹教授のご指導に感謝いたします。

本研究は平成24年度名古屋市立大学特別研究奨励費（決定番号35）および文部科学省科学研究費補助金（基盤研究(c)課題番号：25463495 研究代表者 門間晶子）を受けて実施し、研究成果の一部を第72回日本公衆衛生学会総会、日本子ども虐待防

止学会第19回学術集会、および第73回日本公衆衛生学会総会において発表した。

〔受付 14.06.05〕
〔採用 15.02.03〕

文 献

Anderson, H. / 野村直樹他訳, 会話・言語・そして可能性: 金剛出版, 東京, 2001

アンダーソン, H, グーリシャン, H, 野村直樹: 協働するナラティブ, 遠見書房, 東京, 2013

浅賀万理江, 三浦香苗: 育児初期の母親が抱える心理的混乱への適応過程—語りの分析による質的検討—, 昭和女子大学生活心理研究所紀要, 13: 55-68, 2011

Flick, U., Kardorff, E., Steinke, I.: A Comparison to qualitative research, translated by Jenner, B., Sage Publications, London, 2004

林裕美, 横山恭子: ネガティブな被養育体験を持ちながら適切な情緒応答性を示す母親の特性について: 負の世代間連鎖を断ち切るために, 上智大学心理学年報, 34: 33-42, 2010

Holloway, L., Wheeler, S.: Qualitative research in nursing and healthcare, 3 ed., Wiley-Blackwell, Chichester, 2010

Kleinman, A. / 江口重幸他訳, 病いの語り: 誠信書房, 東京, 1996

門間晶子, 浅野みどり, 野村直樹: ナラティブ研究の可能性を探る—シングルマザーの社会的苦悩を通して—, 家族看護学研究, 16(1): 21-32, 2010

野口裕二: 物語としてのケア, 医学書院, 東京, 2002

野村直樹: 無知のアプローチとは何か, (小森康永, 野口裕二, 野村直樹編著), ナラティブ・セラピーの世界, 日本評論社, 東京, 1999

野村直樹: ナラティブとは何か, (江口重幸, 斎藤清二, 野村直樹編), ナラティブと医療, 金剛出版, 東京, 2006

菅野幸恵, 岡本依子, 青木弥生他: 母親は子どもへの不快感情をどのように説明するか— 第1子誕生後2年間の縦断的研究から—, 発達心理学研究, 20(1): 74-85, 2009

杉万俊夫: 人間科学—当事者と研究者の協同的实践—, 家族療法研究, 24(3): 3-7, 2007

竹崎久美子: 米国の大学院教育で用いられている学位論文評価に関するキーワード, 看護研究, 42(5): 321-327, 2009

内田雅子: 事例研究法における認識論的課題, 看護研究, 46(2): 117-125, 2013

頼経かをる, 永山くに子: 乳児の泣きをめぐり母親が体験した成長プロセス—1事例の生後3か月間にわたるナラティブ・アプローチを活用して—, 母性衛生, 52(1): 120-128, 2011

Leaving Abuse Behind: Mother-Researcher Collaborative Narratives

Akiko Kadoma¹⁾

1) Nagoya City University, School of Nursing

Key words: Narrative, Child abuse, Mothers, Collaboration, Child rearing

Aim: This research considers how the “collaborative narrative” approach can help parents stop abusing their children. I will show how and why changes in narratives, the meaning of the problem, and behavior all arise in connection with each other.

Method: I inquired into experiences, habits, and feelings regarding child rearing during successive interviews of a single mother and situations in which the mother and child were both present. I respected her freedom to choose whether to cooperate with my research, considered her schedule and health, and took care to maintain her privacy. This research was carried out with the approval of my institution’s research ethics committee.

Results and Analysis: In her story, the mother who abused her child spoke of feelings of isolation accompanying child rearing and the inability to gently manage her child without hitting. This hitting was provoked by her feeling that the child is irrational, and other feelings that aggravated this: fatigue, isolation, and disappointment in her self-image as a mother. The collaborative work between the mother and me on searching for “the not-yet-said” led to a narrative of leaving behind abuse and to creating a new relationship. The mother spoke of being able to avoid hitting, reconstructing her relationship with her child, and facing herself and her own parents. This was an example of Goolishian’s collaborative narrative in practice (1988): changes in narratives led to changes in reality and the rewriting, however small, of individuals’ histories.